

「にわとりが鳴いた朝」 —マタイによる福音書講解説教 106—

申命記 第19章 15節
マタイによる福音書 第26章 57節～75節

説教 岡村 恒 牧師

「するとすぐ鶏が鳴いた。」(74節) 私たちの人生には鶏の声を聞いて涙する朝がある。その涙は自分自身の罪の深さを知り、その赦しのために主イエスが負ってくださった痛みを知るときの涙であります。

今日の物語は4つの福音書の全部に書かれています。キリストの使徒ペテロが、主が裁かれていく裁判の場面で、3度(ユダヤ人の発想では徹底的に)、主イエスを知らないと言い切ります。そして3度目に、「彼は『その人のことは何も知らない』と言って、激しく誓いはじめた。するとすぐ鶏が鳴いた。ペテロは『鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われたイエスの言葉を思い出し、外に出て激しく泣いた。」(74-75節)これはペテロにしか知り得ない物語です。後にペテロは今のローマ法王に繋がる教会の柱になる人物です。この物語は彼にとっては消してしまいたい恥の歴史です。

ペテロは最後の晩餐の席上で、弟子たちが裏切ることを予測なさった主イエスに向かって、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」(35節)そう宣言をしました。ほんの数時間後、人間のエゴと悪意が神の独り子を抹殺しようとする最後の場面で、ペテロは自分の言葉を裏切ります。

寒い夜でした。皆、焚き火にあたって話をしていたのではないかと思います。ペテロは、「言葉つかいであなたのことがわかる」(73節)と言われました。幼い日から使ってきた言葉が彼を裏切ります。言葉は人を繋ぐ大切な道具です。神は人間に言葉をもって語りかけ、人間が言葉をもって答えることを、お望みになるお方です。ペテロは、いたるところで神の国が来たことを宣べ伝え、悪霊を追い出し、主イエスを指差して、このお方は神の子キリストだと言い続けてきました。言葉に力があり、自分が発した言葉に責任を負って生き続けてきました。その彼自身の言葉が、彼の本性を暴露し、彼を裏切っていくます。

この夜、ペテロは本当に恐怖を抱いたのだと思います。何より、主イエスが反論することもなさらず、言葉をもって敵に反論することもなさらないのです。打たれ、殴られ、嘲られ、つばきをかけられて、それを目の当たりにしながら彼は失望したでしょう。主イエスへの信頼を

神への信仰を手放したかのように、その人のことは何も知らないと言い放ちます。

主イエスはペテロが主イエスから遠く離れ去ることをご存知でした。「しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。(ルカによる福音書 22章32節)どんな人間の決断も言葉も、私たちを神に結びつけることはできません。それゆえ、神の独り子主イエスが、ご自分の命をもって私たちを神に結びつけてくださいました。

ペテロの涙はやがて乾きました。主イエスによって、拭い取られるようにして彼は立ち直ります。主イエスに語りかけられたからです。「あなたは私を愛するか。」復活をなさった主イエスは、ペテロに3度問いかけ、そしてペテロに「わたしの羊を飼いなさい。」(ヨハネによる福音書 21章16節)と言って、なくてはならぬ務めをお委ねになります。

ペテロにはその後、ペテロを表すシンボルとして鶏のマークが使われるようになります。ペテロは生涯、毎朝、鶏の声を聞く度に、あの涙を、主イエスの赦しを思い起こしたはずです。そこにペテロは喜びと希望を見出しました。ですから彼は新しくいただいた言葉をもって、誰にも言いたくないような最も恥ずかしい、あの朝のできごとを語り続けたに違いないのです。そして自分を表すシンボルが鶏となって後世に残ることを受け入れ、また喜んででしょう。

私たちの生涯には、鶏の鳴く朝が繰り返しあります。自分自身の不信仰、罪の深さを思い知らされる朝です。祈ることさえできなかった私を、神に敵対しているような私を、神が憐れんで赦し、〈あなたは私のものだ〉、とってください朝です。私のために、主が血を流し、十字架で絶望を味わい尽くしてくださった朝です。

あのペテロのように、代々のキリスト者は、自分自身の身を震わせるような思いで、このペテロの物語を読んできました。そして神の赦しの大きさを確認して歩んできました。今日、私たちもまた、鶏の声を魂の奥底で聞いています。あの朝のように、ペテロと一緒に主の赦しの大きさを褒めたたえています。

(記 説教要約奉仕者)